

自己愛と攻撃性の関係について

相 良 陽一郎

相 良 麻 里

自己愛とは narcissism の日本語訳であり、自分自身を愛し、大切に思うことである。その意味で、自己愛とは誰にでも認められる心性であり、人が生きていくために必要なことと言える (Fromm, 1956)。ただその一方で、自己愛のあり方に問題が生じると、自己愛性人格障害のような問題にもつながる (APA, 1994)。つまり、自己愛にはポジティブな面とネガティブな面の双方が認められる (中村, 2004)。

特に近年注目されているのは、自己愛のネガティブな面である。アメリカにおける精神疾患の診断基準 (DSM-IV; APA, 1994) においても、人格障害のひとつとして自己愛性人格障害があげられている。この特徴として、自己に関する誇大な感覚・過剰な賞賛を求める傾向・他人を不当に利用する傾向・共感性の低さ・尊大で傲慢な態度などがあり、その結果、社会生活に支障が生じるという。

人格障害に至らないようなケースでも、誇大な自己愛は対人場面に悪影響を及ぼすことが多い。例えば、誇大な自己愛を持つ人は、根拠のない特権意識を持ち、周りの世界を自己愛的なかたちで支配しようとするが、当然ながらその試みは失敗することが多い。本人が期待したような賞賛も得られないし、対象を独占することもかなわない。その結果、屈辱や怒りといった感情が起こり、周囲と問題を起こすことになる。Kohut (1971) によれば、このような誇大な自己像を形成し維持しようと努力する背景には、傷つきやすく脆弱な自己という自我の病理が潜んでいるという。つまり、自己愛による誇大な自己像を持つことによって、脆弱な自己を防衛していると解釈できるのである。このようにして生じる激しい怒りと攻撃を Kohut (1971) は自己愛性憤怒と呼んだ。また、近年提案された自己本位性脅威モデル

(Baumeister & Boden, 1998) においても、誇大な自己愛によって自己評価が過剰に高い人は、他者からの評価に敏感となると同時に、それが自我脅威となるため、好ましい自己評価を維持しようと防衛的に反駁するような形で怒りの感情を抱き、攻撃行動を表出すると考えられている (湯川, 2005)。

ところで、人間の発達において青年期は、児童期までに確立された自己から脱却し同年代の仲間との間で新たな自己を再構築する必要性から、自然と自己愛傾向が高まる時期である (Kohut, 1971)。そうした一時的な自己愛の高まりがすぐに人格障害等の問題につながるわけではない (APA, 1994) とはいうものの、自己愛の発達のあり方によっては、何らかの不適応行動につながる可能性も高いと思われる。実際、近年の若者においては自己愛の肥大化が問題となっている (小此木, 1992)。例えば、自分の自己愛を守るために平気で他人を傷つけたり利用したりするようなケース、あるいは自分の自己愛が傷つかないようにするため、自己愛が傷つけられる危険性のある場面を避け、学校や社会からひきこもるようなケースも増えているという (町沢, 1998)。それ以外にも、スチューデント・アパシーや不登校、対人恐怖や摂食障害など、青年期に多く見られる社会的不適応には自己愛の問題が関わっていると指摘されており、心理臨床場面においても自己愛に関わる問題が多く取り上げられるようになった (中村, 2004)。

本研究では、青年期の自己愛と攻撃性の関係について、横断的に検討してみたい。青年期の諸問題の中でこの2者の関係に注目するのは以下のような理由からである。第1に、近年、キレる若者の増加や少年犯罪の凶悪化など、青少年の攻撃的・暴力的な行動傾向が問題となっている点、第2に、前述の通り、青年期における不適応行動の多くに自己愛の問題が関わっていること、第3に、精神医学・臨床心理学の諸理論において、自己愛と攻撃性の関連が強く示唆されている (中村, 2004) にもかかわらず、第4として、両者の関係の発達的变化を扱った研究がほとんど見られないことである。

ただし、自己愛と攻撃性の関係については、すでに様々な実証研究がなされてきている (中村, 2000)。例えば、Hart & Joubert (1996) は、99名の大学生を対象に調査を行い、自己愛人格目録 (NPI; Raskin & Hall, 1979) による自己愛傾向と敵意インベントリー (BDHI; Buss & Durkee, 1957) による攻撃性の高さの間に

正の相関を見出している。また Bushman & Baumeister (1998) は、2つの実験を通して、自己愛人格目録 (NPI) による自己愛傾向と、2種類の測度によるセルフ・エスティーム (自尊感情) のうち、どちらが攻撃性に強く影響するかを検討し、自尊感情よりも自己愛が攻撃性に関わっていることを示した。さらに McCann & Biaggio (1989) は、91名の男女大学生を対象に、自己愛人格目録 (NPI) による自己愛傾向と2種類の測度により怒り感情の喚起度を測定し、自己愛傾向が高かったグループの被験者は怒りの感情が強かったこと、そのなかでも特に男性被験者は怒りを暴力で表現する傾向にあることなどを明らかにしている。なお日本人を対象にした研究として、Fukunishi, Hattori, Nakamura, & Nakagawa (1995) は、215名の日本人大学生について自己愛人格目録 (NPI) ・ Marlowe-Crowne の社会的望ましさの尺度 (MCSD; Crowne & Marlowe, 1960) ・ Cook & Medley (1954) の敵意尺度 (Ho Scale; Hostility Scale) を測定し、社会的望ましさの影響を除外した場合でも自己愛傾向と敵意の強さに正の相関が見られることを示した。また湯川 (2003) は、日本語版 NPI (大石・福田・篠置, 1987) の54項目に関して小塩 (1998) が行った因子分析結果をもとに9項目を選択し、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ; 安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井, 1999) の24項目に関して安藤ら (1999) が行った因子分析結果をもとに12項目を選択し、233名の大学生に回答を求めた結果、やはり自己愛傾向が高いほど攻撃性が高いことを明らかにしている。従って、上記の先行研究において用いられている尺度は様々であるが、少なくとも自己愛と他者に対する敵意や攻撃性には密接な関係があり、Kohut (1971) や Baumeister & Boden (1998) が理論的に予想したように、両者には正の相関関係が認められると考えてよいであろう。

しかしこれまでの研究に共通する問題として、調査対象者が大学生であるという点があげられる。従って、これまでに得られた実証的研究成果は、青年期後半に相当する大学生については当てはめられるものの、それ以前の中学生や高校生については不明のままである。そこで本研究では、対象者の範囲を広げ、青年期以前に相当する小学生および青年期前期・中期・後期に相当する中学生・高校生・大学生の男女について調査を行うこととした。

自己愛の測定

本研究における自己愛傾向の測定には小塩（2004）の自己愛人格目録短縮版（NPI-S）の30項目を使用した。これは3つの下位尺度（優越感・有能感，注目・賞賛欲求，自己主張性の各10項目）から構成され，多面的に自己愛傾向を検討することができると同時に，下位尺度値の合計（NPI-S 総得点）から自己愛傾向の強さを扱うこともできる尺度である。

下位尺度のうち，“優越感・有能感”とは，自己肯定感，自己の誇大な感覚，自信などの側面と関連し，自己愛傾向の最も基礎的な要素である。“注目・賞賛欲求”とは，自分が他者に注目されたり賞賛されたりすることを期待する傾向で，不安定な自己肯定感と関わっており，他者の視線を気にする傾向や同性の友人と広く浅くつきあう傾向と関連している。“自己主張性”とは，自分の意見をはっきりと他者に主張するという，やや自己中心的な傾向であるが，安定した自己肯定感や自尊感情と関わっており，社会的場面で不安や気兼ねを感じない傾向や同性の友人と深くつきあう傾向と関連している。

なお小塩（2005）の2成分モデルによれば，上記の下位尺度に対して主成分分析を行って得られる2つの主成分にもとづいて考えると，自己愛の構造を理解しやすくなるという。第1主成分は，3下位尺度に共通する要素が抽出されるが，これは自己愛傾向そのものである。第2主成分は，小塩（2004）のデータによると，優越感・有能感にあまり高い重みを示さず，注目・賞賛欲求に正の重み，自己主張性に負の重みを示すことから，これは注目・賞賛欲求が優位であるか自己主張性が優位であるかを意味する軸であると考えられる。するとこの直交する2軸の組み合わせにより，自己愛の類型化が可能となる。まず第1・第2主成分得点が極端に高くも低くもない場合，自己愛のあり方で問題が生じる可能性は低い。次に，第1主成分得点（自己愛傾向）が低いものは，自己評価を維持することに失敗したり，放棄したりしている可能性が考えられ，さらにその中で第2主成分が注目・賞賛欲求優位である場合，対人恐ろ的・情緒不安定的な傾向を示すという。一方，第1主成分得点（自己愛傾向）がある程度高いからといって，すぐに自己愛的な問題が生じるとは限らない。第2主成分における注目・賞賛欲求と自己主張性のバランスが崩れると，社会的な適応度が低下し不安定な状態になるのであり，特に注目・賞賛欲求が

優位だと Gabbard (1994) のいう“過敏型 (hypervigilant type)”に、自己主張性のほうが優位だと“無関心型 (oblivious type)”に近い特徴を示すという。一般に、過敏型の自己愛者は、他の人々が自分にどのように反応するかについてきわめて敏感であり、常に他者に注意を向けており、その結果として、自分が拒絶されたり軽蔑されたりするような状況を避け、どうすれば他者から受け入れられるかを研究することによって自己評価を維持しようとする。逆に無関心型の自己愛者は、周囲の人々に自分がどのような影響を与えているか気づいておらず、他者の反応を無視することで自己愛的な傷つきから自分自身を隔離し、自己評価を維持しようとする。両者は表面的には正反対の対人関係様式をとるが、どちらのタイプも“他者が持つ自分に関する評価への関心の集中・こだわり”を共通要素として持っているのであるが、対処の仕方が違うだけである (小塩, 2005; 中村, 2004)。

小塩 (2004) は、攻撃性と自己愛の関係について2成分モデルに基づいて検討するため、敵意的攻撃インベントリー (HAI, Hostile Aggression Inventory; 秦, 1990) の下位尺度のうち、具体的な攻撃的行動を意味する“身体的暴力” (私は、思わず暴力をふるってしまうことがときどきある, など10項目)、“言語的攻撃” (私は、口げんかをよくする, など8項目)、“間接的攻撃” (私は、知ったかぶりをする人には、わざといろいろなことを聞いて困らせる, など10項目) を選択し、511名の男女大学生に回答させることで、自己愛人格目録 (NPI-S) との関連を調べている。その結果、両尺度の下位尺度間の相関係数を求めると、優越感・有能感 (NPI-S) は、言語的攻撃 (HAI) と低い値ではあるが有意な正の相関関係 ($r = .26$) にあること、注目・賞賛欲求 (NPI-S) は、言語的攻撃 (HAI) や間接的攻撃 (HAI) と低い値ではあるが有意な正の相関関係 ($r = .19$; $r = .23$) にあること、自己主張性 (NPI-S) は、言語的攻撃 (HAI) と比較的高い正の相関 ($r = .57$) を示し、身体的暴力 (HAI) とも有意ではあるが弱い正の相関 ($r = .12$) を示す傾向にあることが分かった。さらに、NPI-S の下位3尺度に関して主成分分析を行い、累積寄与率が80%をこえた2成分の主成分得点を各調査対象者ごとに算出し、各主成分得点の高低の組み合わせによって調査対象者を4群に分類した上で、先ほどの敵意的攻撃インベントリーの下位3尺度得点を従属変数とする分散分析を行った。その結果、言語的攻撃 (HAI) と間接的攻撃 (HAI) を従属変数とした場合、第1

主成分にもとづく自己愛総合の主効果 [言語的攻撃： $F(1, 507) = 91.02, p < .001$ ；間接的攻撃： $F(1, 507) = 5.85, p < .05$] および第2主成分にもとづく注目－主張の主効果 [言語的攻撃： $F(1, 507) = 14.03, p < .001$ ；間接的攻撃： $F(1, 507) = 6.62, p < .05$] が有意となり，それ以外の主効果および交互作用はいずれも有意ではなかった．従って，自己愛傾向が全体に高い者は低い者に比べて攻撃的であること，また自己愛傾向が全体に高い者の中でも注目・賞賛欲求 (NPI-S) が優位な場合は，間接的な攻撃を行う傾向にあり，自己主張性 (NPI-S) が優位な場合には，言語的な攻撃を行う傾向にあることが示された．

以上の小塩 (2004) の結果を攻撃性という点から解釈すると，まず第1に，総合的な自己愛の高さ (NPI-S 総得点に相当する) は，直接的・具体的な攻撃行動 (身体的暴力) 以外の攻撃性の高さ (言語的攻撃・間接的攻撃) と関連があり，前者が高まると後者も高くなることが分かる．ただし対象者を高・低の2群にしか分けていないため，この結果だけからはどのような関係にあるのかは詳しくは分からない．第2に，注目・賞賛欲求 (NPI-S) と自己主張性 (NPI-S) のどちらが優位かによって攻撃のタイプが異なり，前者が優位だと間接的な攻撃が，後者が優位だと言語的な攻撃があらわれやすいが，直接的・具体的な攻撃行動 (身体的暴力) については，このような優位性と関連しないことが分かる．

ところで自己愛の測定に関して，海外では Raskin & Hall (1979) の自己愛人格目録 (NPI) が使用されることが多く，日本においても大石ら (1987) が NPI を日本語に翻訳した日本語版 NPI が広く用いられているにもかかわらず，今回 NPI-S を使用したのは以下のような理由がある．第1に，NPI の因子構造が一貫しておらず，研究者によって2因子構造から7因子構造までと様々であること．従って，複数の要素から構成される自己愛を検討するのに NPI は適当でない．おそらくこのように一定しない理由としては，小塩 (2004) が指摘するように，多くの研究では因子分析において直交回転モデルが使用されていることが原因であろう．NPI の因子間には同時に高い正の負荷量を示す項目が存在することを考えれば，NPI から見出された下位因子は相互に正の相関関係を持つことが予想できる．従って，相互相関を仮定した斜交回転モデルを採用する NPI-S のほうが安定した下位因子構造を持つと思われる．第2に，NPI の下位尺度に対して主成分分析を行うこと

で得られる主成分を用いると、前述のように、自己愛の類型化に役立つ知見が比較的容易に得られる可能性が高いことである。第3に、日本語版 NPI の項目の中には、被調査者から“回答が困難である”“意味がよく分からない”と指摘されるものが含まれており、より平易な項目群からなる NPI-S のほうが望ましいと考えられるのである。

攻撃性の測定

攻撃 (aggression) という用語は日常生活の中でもよく使われるが、具体的な定義は意外に難しい。ここでは、Baron & Richardson (1994) による定義「どんな形であれ、危害を避けようとする生活体に対して、危害を加えようとしてなされる行動」を攻撃 (行動) としておく。つまり攻撃とは、基本的には相手に危害を加えることを指すが、それだけではなく、相手に対して否定的な結果をもたらそうという意図 (intention) をもって行動することであり、その行為によって意図した結果が得られるだろうという期待 (expectancy) をあらかじめ持っていることなのである (Krahé, 2001)。

このような攻撃行動は様々な形態で表出されるが、Buss (1961) によれば、身体-言語の次元 (物理的か、心理的か)・能動-受動の次元 (自分から攻撃をしかけるか、相手の働きかけを拒否・妨害・無視するか)・直接-間接の次元 (自ら相手に直接手を下すか、相手が傷つく状況を作り上げるか) をもとに8つのタイプ分けができるという。またその目標によって、敵意的攻撃 (攻撃して相手を苦しめることそのものが目標となる場合) と道具的攻撃 (攻撃を手段として用いることで別の何かを手に入れることが目標である場合) に分けることができるという (湯川, 2005)。

以上のような攻撃行動の強さや頻度を規定する仮説構成的な心理特性としての攻撃性を測定するため、従来、様々な尺度が用いられてきた。

例えば、代表的な尺度のひとつに Cook & Medley (1954) の敵意尺度 (Ho Scale) がある。この Ho Scale は、MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory) の中から抽出された50項目によって構成される1次元尺度であるが、ここで測定できる敵意は、皮肉 (cynicism)・不信・軽視を含む他者に対する否定

的な信念と態度であり、どちらかと言えば攻撃性の認知的な側面である“皮肉的敵意 (cynical hostility)”を測定するものとなっている (Blumenthal, Williams, Kong, Schanberg, Thompson, 1978; 安藤ら, 1999).

一方、日本で広く用いられる攻撃性尺度として、安藤ら (1999) の日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) がある。これは、複数の構成概念によって攻撃性を多面的に捉えた Buss & Durkee (1957) の敵意インベントリー (BDHI) およびその改訂版である Buss & Perry (1992) の攻撃性質問紙 (AQ; Aggression Questionnaire) をもとに作成されたものである。安藤ら (1999) は、攻撃性は情動的側面としての“怒り”，認知的側面としての“敵意”，道具的側面としての“攻撃行動”からなる複合的な特性であると考え、この日本版の BAQ においても、Buss & Perry (1992) と同様、情動的側面としての“短気”，認知的側面としての“敵意”，道具的側面としての“言語的攻撃”および“身体的攻撃”の下位 4 尺度によって攻撃性を多面的に測定できるような構成となっている (安藤ら, 1999)。

その他、日本において標準化された尺度として、鈴木・春木 (1994) や三根・浜・大久保 (1997) の怒り行動尺度日本語版、渡辺・小玉 (2001) の怒り喚起・持続尺度がある。これらは、Spielberger (1988) の状態特性怒り表出目録 (STAXI) と同様で、情動状態としての怒りの強さやパーソナリティ特性としての怒りやすさの個人差を測定する尺度と言える (湯川, 2005)。

上記の攻撃性尺度のうち、Cook & Medley (1954) の Ho Scale は前述のように攻撃性の認知的側面に重点がおかれており、Spielberger (1988) の STAXI に代表される怒り傾向の測定尺度は攻撃性の感情的側面に重点があるものと考えられる。従って、本研究のように自己愛との関連で実際の攻撃行動が表出される程度を検討するための尺度としてはあまり適当でない。

一方、安藤ら (1999) の BAQ は、下位 4 尺度として攻撃性の心理的 (感情的・認知的) 側面のほか、行動的 (道具的) 側面についても個別に測定できると同時に、下位尺度値の合計から総体的な攻撃性の強さ (BAQ 総得点) も扱える点が優れている。そこで本研究における攻撃性の測定には、この BAQ を使用したいと思う。ただし、安藤ら (1999) の BAQ 項目はやや多いため、本研究においては、下位 4 尺度の項目から因子負荷量の高いものを 3 項目ずつ選び出して使用している。これ

は、先の湯川（2003）と全く同じ方法であり、同じ項目を抽出したことになる。

なお、BAQ 下位尺度のうち、“短気”とは怒りの喚起されやすさ（怒りっぽさ）を、“敵意”とは他者に対する否定的な信念・態度（他者からの悪意や軽視などの猜疑心や不信感）を抱く傾向を、“言語的攻撃”とは言語的な攻撃反応（自己主張、議論好きなど）を、“身体的攻撃”とは身体的な攻撃反応（暴力的衝動や暴力の正当化など）を意味している（湯川，2003）。

本研究の目的

本研究では、青年期前から青年期全般における自己愛と攻撃性の関係について、発達的な観点から、横断的に検討することが目的であるが、尺度としては上記のように NPI-S と BAQ を使用し、その下位尺度を含め、詳細に検討することが最終的な目的である。そのためには、自己愛や攻撃性そのものの発達的な変化を調べることや、前述のような下位尺度の主成分分析に基づく検討なども必要になるが、本論文では、まず基本的な分析として、下位尺度を含む尺度得点間の相関について、年齢別に吟味することを目的として分析を行うこととする。

【方法】

質問紙の構成

自己愛傾向 小塩（2004）の自己愛人格目録短縮版（NPI-S）の30項目（下位3尺度×各10項目）をそのまま使用した。具体的な質問項目の例としては、“私は、才能に恵まれた人間であると思う”（優越感・有能感），“私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある”（注目・賞賛欲求），“私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う”（自己主張性）、などである。これらの表現がどの程度調査対象者自身に当てはまるかという点に関し、1（全く当てはまらない）から5（とてもよく当てはまる）までの5段階評定を求めることで、下位尺度ごとの評定値合計が得られ、それを各下位尺度得点とした。また30項目全ての合計点を NPI-S 総得点とし、自己愛傾向を表すものとした。

攻撃性 安藤ら（1999）の日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ）の下位4尺度から、それぞれ因子負荷量の高いものを3項目ずつ（ $4 \times 3 = 12$ 項目）選択して使

用した。具体的な質問項目の例としては、“かっとなることを抑えるのが難しいときがある”（短気），“友人の中には、私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない”（敵意），“友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う”（言語的攻撃），“なぐられたら、なぐり返すと思う”（身体的攻撃），などである。自己愛傾向と同様に，各項目に5段階評定を求め，各下位尺度得点およびBAQ総得点を求めた。

調査対象者と手続き

東日本地域に住む小学6年生，中学2年生，高校2年生，および大学生の男女572名を対象に，無記名で質問紙への回答を求めた。大学生については4学年全てが含まれるため，20歳未満と20歳以上に分割し，それぞれ大学生（低）群および大学生（高）群とした。なおそれぞれの対象者数および平均年齢は，小学男子41名（ 11.83 ± 0.31 歳），小学女子42名（ 11.88 ± 0.32 歳），中学男子37名（ 13.87 ± 0.30 歳），中学女子51名（ 13.84 ± 0.29 歳），高校男子97名（ 16.88 ± 0.25 歳），高校女子135名（ 16.83 ± 0.29 歳），大学（低）男子26名（ 19.05 ± 0.37 歳），大学（低）女子44名（ 19.00 ± 0.38 歳），大学（高）男子40名（ 21.55 ± 1.00 歳），大学（高）女子59名（ 21.31 ± 0.81 歳）である。

【結果および考察】

全調査対象者の自己愛傾向（NPI-S総得点）と攻撃性（BAQ総得点）について

全ての対象者572名における各尺度得点間の相関係数を表1に示した。

表1：NPI-SとBAQの相関関係（全対象者） (N = 572)

NPI-S	BAQ				
	総得点	短気	敵意	言語的攻撃	身体的攻撃
総得点	.285 **	.166 **	-.031	.522 **	.119 **
優越感・有能感	.102 *	.028	-.184 **	.367 **	.053
注目・賞賛欲求	.246 **	.180 **	.111 **	.327 **	.066
自己主張性	.368 **	.205 **	-.016	.625 **	.184 **

** $p < .01$, * $p < .05$

自己愛傾向と攻撃性については、低い値ではあるが有意な正の相関関係 ($r = .29$) が見られ、これまでの先行研究 (Hart & Joubert, 1996; 湯川, 2003 など) と同様の結果が得られた。ただし今回の結果は先行研究とは異なり、小学生から大学生までの広範囲な発達過程にある対象者全員に関する結果である。従って、従来 Kohut (1971) や Baumeister & Boden (1998) によって理論的に予想されてきたような自己愛と攻撃性の関連については、大学生だけではなく、広い範囲の年齢層に関しても当てはまること明らかになったと言えよう。

なお今回得られた相関係数はあくまで2変数間の関連を示すものであり、因果関係を示すものではない。よって自己愛傾向と攻撃性の間の関連が示されただけではどちらが原因であるのか決めることはできない。しかしこれまでの理論研究や実証研究などの結果をふまえると、攻撃性の高さが自己愛に影響する可能性は低く、自己愛の高さが何らかのメカニズムによって攻撃性に影響を与えている可能性が高い。もちろん、両者が相互作用している可能性や、第3の要因が関わっている可能性もあるが、基本的には自己愛傾向が独立した原因であり、それによって攻撃性の高さが影響を受けて変化すると考えるのが自然であるように思われる。従って、基本的には以後の考察においても、ここで得られた関連の強さは、自己愛の高さが何らかのかたちで攻撃性に影響している程度の強さとみなすことにする。

全調査対象者の自己愛傾向 (NPI-S 総得点) と攻撃性 (BAQ) 下位尺度の関連

次に、攻撃性の下位4尺度 (短気, 敵意, 言語的攻撃, 身体的攻撃) と自己愛傾向の関連について検討する。

まず第1に、自己愛傾向は、攻撃性の道具的側面である言語的攻撃と比較的強い正の相関 ($r = .52$) を示すが、身体的攻撃とは有意であるが低い正の相関 ($r = .12$) であることから、過大な自己愛を持つほど、それを維持するために攻撃行動を表出しやすくなることが示され、その際の攻撃行動としては、どちらかと言えば直接的・暴力的なものよりも、議論や自己主張などの言語的な形態をとる傾向にあることが示された。この点については、先に紹介した小塩 (2004) の結果と一致している。今回、身体的攻撃と自己愛の関連が低かった理由として、自己愛憤怒のような怒りを暴力で表現するのが男性に多く、女性に少ないこと (McCann &

Biaggio, 1989),あるいは年齢が上がるにつれて,身体的な暴力に訴える解決法よりも,言語的な解決法が有効となるであろうことなどを考えると,小学生から大学生までの様々な年齢の男女を対象とするデータにおいては明確な結果としてあらわれにくいことがあげられる.こうした点は各対象者群ごとに検討をすることで明らかになるであろう.

第2に,自己愛傾向と敵意の間に相関が見られなかったことから,一般的な自己愛の強さは,攻撃性の認知的側面である敵意に結びつかないことが示された.しかしこの点は,敵意尺度と自己愛の関係を検討した Fukunishi et al. (1995)の結果と一致しない.その理由としては,彼らの使用した Cook & Medley (1954)の敵意尺度(Ho Scale)は,皮肉・不信・軽視を含む他者に対する否定的な信念と態度を測定するためのものであり,今回のBAQにおける敵意とは異なる尺度であったことが考えられる.実際,本研究と同様にNPI-SとBAQを用いた湯川(2003)においてはやはり自己愛傾向(NPI-S総得点)と敵意(BAQ)に相関はない.また,もうひとつの理由として,敵意との関係が自己愛の下位3尺度(優越感・有能感,注目・賞賛欲求,自己主張性)によって異なる可能性があげられる.そこでこの敵意に関しては,後述する自己愛の下位尺度の結果をふまえて再検討することにした.

第3に,攻撃性の情動的側面である短気と自己愛傾向との間には,有意ではあるがほとんど相関はないため($r = .17$),両者の関連はいちおう認められるものの,自己愛の高さがすぐに怒りやすさにつながるわけではないことが示された. Kohut (1971)やBaumeister & Boden (1998)の枠組みによれば,自己愛の過剰な高さが強い怒り感情に結びつくはずであり,ここでの相関が低いことは予想に反している.このような結果になった理由として,今回使用した短気尺度が“怒りの喚起されやすさ(怒りっぽさ)”を測定するものではあるが,具体的な質問項目を見ると,どの程度容易に怒り感情が生じるか(頭に血がのぼりやすいか)を自己判断させている項目の多いことが影響している可能性がある.つまり本来の自己愛性憤怒においては,本人からすれば自我脅威に対する防衛的な対処という“充分な”理由があって怒るのであるから,今回の短気尺度のように“容易に”怒っているのではないというわけである.特に自己愛傾向が高い者は,本人の認識の中では周囲と

良好な関係を築く優秀な人物であるという自己認識があるため、容易に怒るようなパーソナリティと同一化することは難しいであろう。つまり、自分は滅多に怒ることはないが、もし自分を怒らせるようなことがあるならば、相手が悪いというわけである。従って、自己愛傾向が高い者はここで用いた短気尺度に反応することは少ないと考えられ、そのために短気との相関は低くなってしまっている可能性が高い。この問題については今回と同様の尺度を用いる場合不可避なものであり、今後の検討が必要である。

全調査対象者の自己愛（NPI-S）の下位尺度と攻撃性（BAQ 総得点）の関連

次に、自己愛の下位 3 尺度（優越感・有能感、注目・賞賛欲求、自己主張性）と攻撃性の関連についての検討を行う。

優越感・有能感は BAQ 総得点と有意ではあるがほとんど相関はなく ($r = .10$)、自己肯定感や自己の誇大感だけではすぐに攻撃性を高めることにつながらないことが分かる。優越感・有能感は自己愛傾向の最も基礎的な要素であるが、小塩 (2005) の 2 成分モデルでも指摘されていたように、自己愛が単純に高いだけでは問題とならないことから考えても、この優越感・有能感が高いだけでは攻撃性が高まることは少ないのであろう。

注目・賞賛欲求については弱い有意の相関 ($r = .25$) が認められ、自分が他者から注目・賞賛を受けたいという欲求が高いと、結果的に期待したような結果は得られないため、相手を攻撃することにつながる様子がある程度認められる。また自己主張性についてもやはり有意な正の相関 ($r = .37$) が認められ、他者の反応を気にせずに自分の意見をはっきり主張する自己中心性が高いと、本人は意図しなかった場合でも結果的に他者を攻撃することになり、攻撃性も高く評定されることが分かる。なお小塩 (2005) の 2 成分モデルによると、注目・賞賛欲求および自己主張性については、両者のバランスがとれている限り問題となることは少なく、両者のバランスが崩れると社会的な適応度が低下し不安定な状態になるとされている。今回は各対象者ごとに主成分得点等を算出していないために、2 成分モデルに基づく検討はできないが、少なくともどちらか一方でも高まることによって攻撃性と関連する可能性が示されたといえるであろう。

全調査対象者の自己愛 (NPI-S) および攻撃性 (BAQ) の各下位尺度間の関連

下位尺度間で注目すべき点としては、言語的攻撃と自己愛の下位尺度間に比較的強い正の相関 ($r = .33 \sim .63$) が見られる点である。自己主張性については、前述の通り、自分の意見をはっきり主張することは言語的攻撃に直結するために相関も高くなるのであろうが、その他の自己愛傾向とも相関が見られることから、自己愛を維持するための基本的な攻撃反応として自己主張や議論好きなどの言語的反応が主に用いられていることが分かる。それに対し、身体的攻撃についてはほとんど相関が見られず、自己愛維持のための攻撃反応としては一般的でないことが分かる。

なお、自己愛の注目・賞賛欲求および自己主張性に注目すると、攻撃性の下位尺度の多くと有意な正の相関 ($r = .11 \sim .63$; ただし注目・賞賛欲求と身体的攻撃、自己主張性と敵意の間の相関は除く) が得られており、ここでも基本的には Kohut (1971) や Baumeister & Boden (1998) の枠組みに沿った結果が得られている。

全調査対象者の自己愛 (NPI-S) 各下位尺度と敵意 (BAQ 下位尺度) の関連について

ところが、攻撃性の敵意に注目すると、優越感・有能感とは有意ではあるが弱い負の相関 ($r = -.18$)、注目・賞賛欲求とは有意ではあるが弱い正の相関 ($r = .11$)、そして自己主張性とは相関なし ($r = -.02$) というように、これまでの結果とは異なった様相を呈している。この結果には、自己愛者における自己認識と他者認識の傾向が反映されているものと考えられる。

例えば小塩 (2004) によれば、自己愛傾向が高い者は、周囲から自分が信頼され、好かれており、友人も多いと思いついでいるが、実際に調査してみると確かに周囲から好かれてはいるものの、信頼されているとは限らないため、信頼という点では自己洞察や正確な自己評価に失敗しているという。逆に自己愛傾向が低い者は、実際には他者から信頼されているにもかかわらず、自分は信頼されていないと思いついでいることが多く、やはり正確な自己評価に失敗しているのである。言い換えれば、自己愛傾向の高い者は自己をとりまく社会関係についても過大評価を行い、自己愛傾向の低い者は過小評価をするという、まさに自己愛の定義通りの認識を行っていることが分かる。ここから考えると、自己愛傾向の最も基礎的な要素である優越感・有能感はまさに上記の過大評価・過小評価の軸と一致しており、この尺度で

高得点を示す場合、自己に限らず他者についても好意的・友好的な認識を持つが、逆に得点が低い場合は非好意的・猜疑的な認識を持つことになる。よって攻撃性における敵意尺度は、他者に対する否定的な信念・態度（他者からの悪意や軽視などの猜疑心や不信感）を抱く傾向を測定するため、優越感・有能感とは負の相関関係を示すことになる。

一方、注目・賞賛欲求は、自分が他者に注目されたり賞賛されたりすることを期待する傾向であるが、不安定な自己肯定感と関わっており、他者の視線を気にする対人恐怖的な傾向や、同性の友人と広く浅くつきあう傾向と関連している。そしてこの傾向が強くなると、他の人々が自分にどのように反応するかについて敏感となり、常に他者に注意を向け、できる限り自分が拒絶されたり軽蔑されたりするような状況を避けると同時に、どうすれば他者から受け入れられるかを研究することによって自己評価を維持しようとするのである。つまり、注目・賞賛欲求が強くなると他者と表面的にしか関わらず、常に相手の真意に疑心暗鬼になることが予想される。従って、攻撃性における敵意尺度とは正の相関を示すことになる。

また、自己主張性は、自分の意見をはっきりと他者に主張するという自己中心的な傾向であるが、安定した自己肯定感や自尊感情と関わっており、社会的場面で不安や気兼ねを感じない傾向や同性の友人と深くつきあう傾向と関連している。そしてこの傾向が強くなると、周囲の人々に自分がどのような影響を与えているか考えず、他者の反応を無視することで自己愛的な傷つきから自分自身を隔離し、自己評価を維持しようとするのである。つまり自己主張性については、その傾向が強ければ他者を無視し、弱ければ他者をよく見ようとするものの、他者を否定的に認識する傾向とは無関連である。従って攻撃性における敵意尺度とは相関を持たないであろう。

小学生における自己愛傾向（NPI-S）と攻撃性（BAQ）に関して

次に、小学6年生の対象者（83名）における各尺度得点間の相関（表2）について検討を行う。

表2：NPI-S と BAQ の相関関係（小学生）

($N = 83$)

NPI-S	BAQ				
	総得点	短気	敵意	言語的攻撃	身体的攻撃
総得点	.417 **	.274 *	.070	.683 **	.182
優越感・有能感	.284 **	.167	.002	.576 **	.088
注目・賞賛欲求	.463 **	.311 **	.211	.596 **	.223 *
自己主張性	.364 **	.255 *	-.035	.652 **	.175

** $p < .01$, * $p < .05$

自己愛と攻撃性の総得点については比較的強い正の相関 ($r = .42$) が認められ、攻撃性総得点と自己愛の下位3尺度についても有意な正の相関 ($r = .28 \sim .46$) が得られた点については、先の全対象者における結果 (表1) と基本的に同一である。また攻撃性の言語的攻撃と自己愛の各尺度間にもかなり強い正の相関 ($r = .58 \sim .68$) が見られ、この時期の児童においては自己愛の各側面と言語的攻撃反応が強く結びついていることが分かる。ただし上記のうち、優越感・有能感と攻撃性総得点の相関が比較的高くなっている ($r = .28$) のは、優越感・有能感と言語的攻撃の相関がかなり高い ($r = .58$) ため、結果的に総得点についても高い相関値となっているものと考えられる。

なお攻撃性の短気に関しては、自己愛総得点、注目・賞賛欲求、自己主張性とそれぞれ有意だが弱い正の相関があり ($r = .27$; $r = .31$; $r = .26$)、いずれもパターンとしては先の全対象者における結果 (表1) と一致するが、比較的強い相関を示すものとなった。これは一般的な青年期における自己認識に比べて、小学生の自己認識においては自己の客観視が不十分であることに起因しているように思われる。

一方、全対象者の結果 (表1) と異なった部分としては、身体的攻撃および敵意に関する相関がある。身体的攻撃については、注目・賞賛欲求のみと弱い相関 ($r = .22$) があり、この年代においては直接的な暴力に訴えることのハードルが低く、注目・賞賛欲求にもとづいて身体的攻撃が行われる可能性を示していると考えられる。また、敵意に関しては全く有意な相関は得られなかったことから、先述のような自己愛者における自己認識と他者認識の傾向があまり顕著でないことが推察される。ただし自己主張性と敵意の間に相関がないという点では、全対象者の結果と一致していると考えられることもできる。

中学生における自己愛傾向（NPI-S）と攻撃性（BAQ）に関して

次に、中学2年生の対象者（88名）における各尺度得点間の相関（表3）について検討を行う。

表3：NPI-SとBAQの相関関係（中学生） (N = 88)

NPI-S	BAQ				
	総得点	短気	敵意	言語的攻撃	身体的攻撃
総得点	.281 **	.065	.166	.519 **	.070
優越感・有能感	.090	-.114	.023	.330 **	.034
注目・賞賛欲求	.324 **	.156	.224 *	.396 **	.148
自己主張性	.281 **	.108	.158	.593 **	-.020

** $p < .01$, * $p < .05$

攻撃性の総得点と自己愛の各尺度の関連については、基本的に先の全対象者における結果（表1）と一致するものであった。優越感・有能感と攻撃性総得点の間には相関が見られない点については、前述の通り、小塩（2005）の2成分モデルから予想できる結果である。

しかし短気と身体的攻撃のいずれにおいても自己愛の各尺度と関連が全く見られず、全対象者における結果とは異なっていた。青年期の初期段階にあたるこの時期においては、自己愛は情動的な怒り反応や身体的な攻撃反応と関連していない可能性がある。また敵意に関しては、注目・賞賛欲求と有意な弱い正の相関 ($r = .22$) を示し、この点では全対象者における結果と一致したが、敵意と優越感・有能感は関連がなく、その点では一致していない。

高校生における自己愛傾向（NPI-S）と攻撃性（BAQ）に関して

次に、高校2年生の対象者（232名）における各尺度得点間の相関（表4）について検討を行う。

表4：NPI-SとBAQの相関関係（高校生）

(N = 232)

NPI-S	BAQ				
	総得点	短気	敵意	言語的攻撃	身体的攻撃
総得点	.255 **	.096	-.084	.521 **	.144 **
優越感・有能感	.069	-.013	-.249 **	.361 **	.061
注目・賞賛欲求	.201 **	.095	.063	.341 **	.053
自己主張性	.393 **	.169 *	-.031	.641 **	.268 **

** $p < .01$, * $p < .05$

攻撃性の総得点に関わる部分については、先の中学生（表3）と同じパターンを示し、同じく全対象者の結果（表1）と一致するものであった。また攻撃性の言語的攻撃および身体的攻撃に関しても、全対象者の結果と全く同じである。このようになった理由のひとつに、高校生の対象者が232名と他の群に比べて多く、全対象者の結果に影響を与えやすかったことが考えられる。

一方、短気に関してはほとんど相関はないが、自己主張性と弱い正の相関 ($r = .17$) を示し、この点では全対象者における結果と一致したが、その他の点では一致していない。敵意に関しては、優越感・有能感と弱い負の相関 ($r = -.25$) を示し、この点では全対象者における結果と一致したが、その他の点では一致していない。

大学生（20歳未満）における自己愛傾向（NPI-S）と攻撃性（BAQ）に関して

次に、20歳未満の大学生（70名）における各尺度得点間の相関（表5）について検討を行う。

表5：NPI-SとBAQの相関関係（大学生低学年）

(N = 70)

NPI-S	BAQ				
	総得点	短気	敵意	言語的攻撃	身体的攻撃
総得点	.277 *	.254 *	-.184	.444 **	.176
優越感・有能感	.039	.074	-.340 **	.372	-.044
注目・賞賛欲求	.153	.165	.078	-.070 **	.211
自己主張性	.408 **	.312 **	-.163	.695 **	.204

** $p < .01$, * $p < .05$

自己愛総得点と攻撃性総得点，自己主張性と攻撃性総得点，自己愛総得点と言語

的攻撃のそれぞれにおいて正の相関 ($r = .28$; $r = .41$; $r = .44$) が認められた点はこれまでの結果と同じであったが、これまでは常に有意であった注目・賞賛欲求と言語的攻撃が無相関となり、それに伴って注目・賞賛欲求と攻撃性総得点の相関も有意でなくなった点が大きく異なっている。従って、青年期でもこの時期に至ると注目・賞賛欲求が高いだけでは攻撃性に結びつかなくなっていることが見てとれる。

一方、短気に関しては、高校生（表4）と同様、自己主張性と弱い正の相関 ($r = .31$) を示し、その結果自己愛総得点とも弱い正の相関 ($r = .25$) が見られたという点では全対象者における結果（表1）と一致したが、その他の点では一致しなかった。敵意に関しても、優越感・有能感と弱い負の相関 ($r = -.34$) を示し、この点では全対象者における結果と一致したが、その他の点では一致していない。

大学生（20歳以上）における自己愛傾向（NPI-S）と攻撃性（BAQ）に関して

次に、20歳以上の大学生（99名）における各尺度得点間の相関（表6）について検討を行う。

表6：NPI-SとBAQの相関関係（大学生高学年） (N = 99)

NPI-S	BAQ				
	総得点	短気	敵意	言語的攻撃	身体的攻撃
総得点	.266 **	.157	-.077	.358 **	.205 *
優越感・有能感	.069	.014	-.257 *	.162	.191
注目・賞賛欲求	.161	.152	.086	.162	.016
自己主張性	.385 **	.186	-.010	.504 **	.273 **

** $p < .01$, * $p < .05$

自己愛総得点と攻撃性総得点、自己主張性と攻撃性総得点、自己愛総得点と言語的攻撃のそれぞれにおいて正の相関 ($r = .27$; $r = .39$; $r = .36$) が認められた点はこれまでの結果や大学生（低）群と一致していたが、注目・賞賛欲求と言語的攻撃の相関 ($r = .16$) および優越感・有能感と言語的攻撃の相関 ($r = .16$) がいずれも有意でない点は、これまでと大きく異なっている。従って、この時期においては、注目・賞賛欲求と優越感・有能感のどちらも攻撃性に結びつかなくなっ

ており、攻撃性と関連するのは自己主張性のみであることが分かる。

一方、短気に関して有意な相関はなく、その点では中学生の結果と似ているが、敵意に関しては、優越感・有能感と弱い負の相関 ($r = -.26$) を示し、この点では高校や大学、あるいは全対象者における結果と一致した。

【全体の考察】

本研究では、青年期前から青年期全般における自己愛と攻撃性の関係について、横断的に検討するため、572名の小学生・中学生・高校生・大学生を対象に、NPI-SとBAQにより自己愛傾向と攻撃性を測定し、下位尺度を含めた両尺度間の相関を年齢群ごとに検討した。

その結果、全対象者に関して、自己愛と攻撃性の間に正の相関が認められ、Kohut (1971) や Baumeister & Boden (1998) が理論的に予想したように、自己愛の高さと攻撃性の強さには関連があることが示された。ただしこれまでになされた実証研究の多くは大学生を対象とするものであったが、今回その範囲を小学生から大学生に広げてもなお同じ結果が得られたことは重要である。

次に攻撃性の下位尺度との関連で見ると、多くの場合言語的攻撃と自己愛の各尺度の間に正の相関が認められる一方、身体的攻撃とはあまり相関がなかったことから、自己愛の高まりによって生じる道具的攻撃反応としては、暴力的な身体的攻撃よりも、自己主張などの言語的攻撃が用いられることが分かる。なお高校生までを対象とした場合、優越感・有能感、注目・賞賛欲求、自己主張性のいずれもが言語的攻撃と正の相関を示すが、大学生を対象とした場合は優越感・有能感や注目・賞賛欲求との相関が見られなくなることから、加齢とともに言語的攻撃をはじめとした攻撃性を引き起こす自己愛のあり方が変化し、自己主張性という要素が強くなっていくことが分かる。ただし小塩 (2005) の2成分モデルによれば、自己愛の下位3尺度が攻撃性に与える影響については、互いのバランスに基づいて判断すべきと考えられるため、今回の結果だけからは明確な結論を得ることは難しい。今後さらに検討を要する問題である。

今回の結果で明確な結論が得られなかったもう一点は、攻撃性の情動的側面に相

当する短気についてである。全体的に見て、短気は自己愛の自己主張性とやや関連があり、これには自己主張性が持つ自己中心傾向によって他者への怒りが引き起こされやすいためだと思われるが、年齢群によって自己愛尺度との相関が得られる場合と得られない場合があり、系統的な発達変化が認められない。この背景には、前述の通り、本尺度で測定している“怒り”と自己愛性憤怒における“怒り”とが必ずしも一致していないことが影響しているものと考えられる。従ってこの問題についても今後解決していく必要がある。

一方、攻撃性の認知的側面に相当する敵意に関しては、全対象者で一貫しており、①優越感・有能感とは負の相関、②注目・賞賛欲求とは正の相関、そして③自己主張性とは無相関という結果であった。これには前述の通り、自己愛者における自己認識と他者認識の傾向が反映されているものと考えられる。ただし、①～③全てが同時に観察されたのは全対象者に関して（表1）のみで、小学生では有意ではないが②と③が（表2）、中学生では有意な②と③が（表3）、高校生と大学生では有意な①と③が（表4～6）それぞれ別個に得られており、①～③の傾向は発達的に変化する可能性が示されたと言える。つまり、青年期以前（小学生）には十分な自己・他者認知ができないが、青年期に入ると（中学生に相当）、注目・賞賛欲求に基づいた不安定な自己肯定感や他者の視線を気にする対人恐怖的な傾向が生じ、他者に対する否定的な信念を持つようになり、青年期中頃から（高校生以降）は優越感・有能感に基づき、社会関係に関する過大評価（あるいは過小評価）をするようになるのである。つまり全対象者（表1）における①～③の傾向は、各年齢群における個別の結果が合成されてあらわれたものと考えられることができる。

ただし、こうした自己愛傾向は青年期を脱するにつれて徐々に収束し、成人期になると自己愛傾向が低くなると考えられるため（Watson, Grisham, Trotter, & Biderman, 1984）、いずれ上記のような傾向は沈静化していくのであろう。

【参考文献】

American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed.)*. Washington DC: Author.

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子
1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- Baron, R. A., & Richardson, D. R. 1994 *Human aggression (2nd ed.)*. New York: Plenum Press.*
- Baumeister, R. F., & Boden, J. M. 1998 Aggression and the self: High self-esteem, low self-control, and ego threat. In R. Geen & E. Donnerstein (Eds.), *Human aggression: Theories, research, and implications for social policy*. San Diego, CA: Academic Press.*
- Blumenthal, J. A., Williams, R. B., Kong, Y., Schanberg, S. M., & Thompson, L. W. 1978 Type A behavior pattern and coronary atherosclerosis. *Circulation*, **58**, 634-639.***
- Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. 1998 Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 219-229.
- Buss, A. H. 1961 *The psychology of aggression*. New York: Wiley.*
- Buss, A. H., & Durkee, A. 1957 An inventory to assess different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 343-348.
- Buss, A. H., & Perry, M. 1992 The Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 452-459.
- Cook, W. W., & Medley, D. M. 1954 Proposed hostility and pharisaic-virtue scales for the MMPI. *Journal of Applied Psychology*, **39**, 414-418.**
- Crowne, D. P. & Marlowe, D. 1960 A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, **24**, 349-354.**
- Fromm, E. 1956 *The art of loving*. New York: Harper & Brothers. (懸田克躬 (訳)
1959 愛するということ 紀伊國屋書店)
- Fukunishi, I., Hattori, M., Nakamura, H., & Nakagawa, T. 1995 Hostility is related to narcissism controlling for social desirability: Studies of college students and patients with myocardial infarction. *Journal of Psychosomatic Research*, **39**, 215-220.
- Hart, P. L., & Joubert, C. E. 1996 Narcissism and hostility. *Psychological Reports*, **79**, 161-162.
- 秦一士 1990 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, **61**, 227-234.
- Gabbard, G. O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington: American Psychiatric Press.
- Kohut, H. 1971 *The analysis of the self*. New York: International University Press.
(水野信義・笠原嘉 (監訳) 1994 自己の分析 みすず書房)
- Krahé, B. 2001 *The social psychology of aggression*. East Sussex, UK: Psychology Press. (秦一士・湯川進太郎 (訳) 2004 攻撃の心理学 北大路書房)
- 町沢静夫 1998 現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理 双葉社.
- McCann, J. T., & Biaggio, M. K. 1989 Narcissistic personality features and self-

- reported anger. *Psychological Reports*, **64**, 55-58.
- 三根浩・浜治世・大久保純一郎 1996 怒り行動尺度日本語版の標準化の試み 感情心理学研究, **4**, 14-20. *
- 中村晃 2000 自己愛と対人関係 自己心理学研究, **1**, 73-83.
- 中村晃 2004 健全な自己愛と不健全な自己愛 千葉商大紀要, **42**, 1-20.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 ナルシズム的人格の基礎的研究(1)—ナルシズム的人格目録の信頼性と妥当性について—日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.
- 小此木啓吾 1992 自己愛人間 ちくま学芸文庫.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 小塩真司 2004 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版.
- 小塩真司 2005 自己愛人格の構造と適応過程 梶田叡一(編) 自己意識研究の現在 2 ナカニシヤ出版 pp. 101-118.
- Raskin, N., & Hall, C. S. 1979 A Narcissistic Personality Inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Spielberger, C. D. 1988 *Manual for the State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI)*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources. *
- 鈴木平・春木豊 1994 怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究, **7**(1), 1-13.
- 渡辺俊太郎・小玉正博 2001 怒り感情の喚起・持続傾向の測定: 新しい怒り尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 健康心理学研究, **14**(2), 32-39.
- Watson, P. J., Grisham, S. O., Trotter, M. V., & Biderman, M. D. 1984 Narcissism and empathy: Validity evidence for the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 301-305.
- 湯川進太郎 2003 青年期における自己愛と攻撃性—現実への不適応と虚構への没入をふまえて— 犯罪心理学研究, **41**, 27-36.
- 湯川進太郎 2005 バイオレンス: 攻撃と怒りの臨床社会心理学 北大路書房.

*** 安藤ら(1999)による引用

** Fukunishi et al. (1995)による引用

* 湯川(2005)による引用